

芦屋大学論叢 第86号

(令和8年7月31日)抜刷

親子関係と学年が大学生の自我同一性形成に与える影響

－日本と中国を比較して－

三 浦 正 樹
楊 沢 升

親子関係と学年が大学生の自我同一性形成に与える影響

－日本と中国を比較して－

三 浦 正 樹 (1)

楊 沢 升 (2)

(1) 芦屋大学臨床教育学部

(2) 芦屋大学大学院博士後期課程

1. はじめに

青年期は「自分は何者であるか」「どのように生きるべきか」を問い、自己のあり方を模索する時期である(注1)。エリクソン¹⁾は、この時期に確立されるべき心理社会的課題として自我同一性(アイデンティティ)の形成を位置づけた。自我同一性とは、自己の一貫性や連続性の感覚、自己意識の明確さ、他者から見られる自己との一致感、社会との結びつきといった多面的な感覚から構成される(注2)。谷(2001)²⁾はこれらを整理し、連続性・対自的同一性・対他的同一性・心理社会的同一性の4下位尺度からなる多次元自我同一性尺度(MEIS)を作成し、青年期研究に広く用いられている。

自我同一性の形成には、重要な他者との関係が大きく影響する(金 2006³⁾)。特に親子関係は、青年が自己を理解し、他者の視点を取り入れながら自己を再構築する上で重要な役割を果たす。高橋(2008)⁴⁾は、進路選択時の親子間コミュニケーションと青年期のアイデンティティ達成の関連について調べている。また平田(2018)⁵⁾は、父親と母親の養育スタイルが大学生の自我同一性の統合に寄与することを報告している。しかし、これらの研究は日本国内を対象としたものであり、文化の異なる国において親子関係が自我同一性にどのように影響するかについては十分に検討されていない。一方、大学生活という環境も青年の自我形成に影響を与える。大学時代は学業、友人関係、進路選択など多様な課題に直面し、学年の進行に伴い心理的特徴や発達課題が変化する時期である(鶴田 2001⁶⁾、徳田 2008⁷⁾)。松島・尾崎(2013)⁸⁾や宇都宮(2018)⁹⁾は、学年が上がるにつれて自我同一性得点が高まる傾向を示しているが、いずれも日本国内の研究であり、学年進行に伴う自我同一性の変化に文化差が存在するかについては明らかでない。

さらに自我同一性に関する日中比較研究は一定数存在するものの、結果は一貫していない。この不一致は、文化的背景だけでなく、時代的・社会経済的状況の違い、サンプル特性などが影響している可能性がある。日本と中国は同じアジア文化圏に属しながら、家族構造、教育制度、社会的期待などに違いがある。特に中国では一人っ子政策の影響により、親子関係が密接である一方、親の期待が強く、青年の自立が遅れる傾向が指摘されている。このような文化的背景の違いは、親子関係が自我同一性に及ぼす影響の大きさや方向性に差を生じさせる可能性がある。

先行研究を踏まえると、まず、親子関係と自我同一性の関連を日中で比較した研究は存在しない。2つ目に学年進行に伴う自我同一性の変化に文化差があるかは未検討であることから、本研究により従来の研究ギャップが明確になることが期待される。以上を踏まえ、本研究では、日本と中国の大学生を対象に、親子コミュニケーションが自我同一性の形成に及ぼす影響を比較検討することを目的とする。また、学年(1～4年)の違いが自我同一性にどのような影響を与えるかを日中で比較することも目的とする。

2. 先行研究

1. 親子関係と自我同一性

親子関係が自我同一性の形成に与える影響についてみたものに、高橋（2008）⁴⁾がある。高橋は男子大学生を対象に、進路選択時の親子間コミュニケーションの特徴をとらえる尺度を作成し、アイデンティティとの関連を検討した。親の特徴として“独自性”“結合性”“議論の抑制”の因子が抽出されたが、独自性と結合性が両方高い“相互交渉”や結合性だけが高い“応援”は、両方低い“不明確”より青年のアイデンティティ達成得点が高かった。結果から高橋は、「親子間で議論を避けないこと、親が青年に受容的、支持的であることが、男子青年のアイデンティティの感覚の高さと職業決定への積極的取り組みと関連することが示唆された」としている。平田（2018）⁵⁾も親子関係と自我同一性の関係についてみている。具体的には、青年期後期にあたる大学生男女を対象に、定位家族における父親、母親の権威的養育スタイル、権威主義（独断）的養育スタイル、許容的養育スタイル、そして放任的養育スタイルが、青年期のアイデンティティの統合にどのように関わっているのかを検討している。結果、権威的養育スタイルの父親、母親に育てられたと回想する大学生は、放任的養育スタイルの父親に育てられたと回想する大学生、権威主義（独裁）的養育スタイル、放任的養育スタイルの母親に育てられたと回想する大学生よりも自我同一性の統合が有意に高いことを示している。

2. 大学生活や学年の影響についてみた研究

鶴田（2001）⁶⁾は「学生生活サイクルの視点」を提唱し、大学生の学年移行に伴う心理的特徴や発達課題の変化を軸として、大学生を理解することの重要性を示唆している。この心理学的特徴や発達課題は、学業、進路、学生生活、対人関係、親子関係など多様な領域にまたがる多元的なものであり（徳田、2008）⁷⁾、多くの学生は各学年で固有の発達課題と取り組みつつ、比較的似通った過程を経て学生期を通過していく。したがって学生生活そのものが、大学生の自我形成に大きな影響を与えられとされる。これに関連し松島・尾崎（2013）⁸⁾は大学観や大学満足感、進路意識等、大学生活全般の諸変数の関連について検討しているが、その中で、学年特有の要因や発達の視点を重視し、自我同一性について1年次から3年次の結果を比較検討している。自我同一性の尺度は谷（2001）の因子構造を基に、多次元自我同一性の下位尺度得点が算出している。多次元同一性尺度の3年間の変化についてみると、20項目の合計点は学年と共に微増しており、18～22歳の大学生男女を対象に、学年が上がるにつれてMEISの合計得点が上昇することを示した谷の結果と同様であったが、松島・尾崎では統計的に有意な差異はみられていない。また、下位尺度では、全ての尺度で上昇が見られるわけではなく、3年間を通して大きな変化はみられないという結果を示している。宇都宮（2018）⁹⁾も大学生におけるアイデンティティ発達と学業、友人、家族機能の関連を学生生活サイクルから調査する中で学年との関係を見ている。アイデンティティは「個としてのアイデンティティ」および「個体内関係性（母親などとの関わりから形成される内在化された他者像）」、「社会的関係性（実地的な他者との関係）」からなる「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度を用いている。学年は1・2年生と3・4年生をまとめ、その差を見ている。その結果、「個のアイデンティティ」とアイデンティティ総得点において3・4年生の方が得点が高い傾向が見られたとしている。

3. 自我同一性尺度についての日中比較研究

許・田中（2004）¹⁰⁾は、加藤（1983）¹¹⁾による尺度を用い日中の大学生の自我同一性地位について比較検討した。その結果、日本の大学生の「同一性達成」、「D-M 中間」（拡散とモラトリアムの間）が中国の

大学生より有意に多く、中国の大学生の「A-F 中間」(達成と早期完了の間)、「積極的モラトリアム」が日本人より有意に多かった。張・宮下 (2013)¹²⁾ は、日中青年における自己愛傾向とアイデンティティとの関連を比較することを目的とした研究を行っているが、その中で、谷 (2001) の自我同一性尺度 (MEIS) を用いている。その結果によれば、下位尺度の連続性では日中で差がなく、対自的同一性と心理社会的同一性は中国が日本より得点が高く、対他的同一性は日本の方が中国より得点が高いという結果となっている。董・菅 (2014)¹³⁾ は日中大学生の比較に注目して自己意識と職業決定の関係を見る目的でキャリア関係の尺度、自己意識関係の尺度計 6 種類の質問紙調査を行っている。なお中国人の参加者は中国から日本に留学している大学生である。その尺度の中で谷の MEIS を用いているが、下位尺度の連続性で日本の方が中国より得点が高かったが、その他の下位尺度では差がなかった。同じ MEIS を用いた日中比較研究であるが、張・宮下の結果と異なる。このような違いについてみる際、文化的背景だけではなく時代的背景や社会経済的背景も考慮する必要があるのではないだろうか。例えば、水野 (2006)¹⁴⁾ は、社会的確立と自我確立からなる独自の自我同一性尺度を用いて社会的確立は中国の方が日本より高く、自我確立は日中で差がないことを示しているが、それは学校を卒業しても就職せずにフリーターやニートになる若者が問題となっている時期の結果である。現在は中国において就職率が低下している時期であるため、日中を比較する際は文化差やサンプル差だけではなく、時代的、社会的背景を含めた比較・考察が必要であろう。

3. 調査研究 目的と方法

目的

本研究の目的は日中の比較に注目して親子関係が自我同一性の形成に及ぼす影響について実証的に調べることである。自我同一性に関する日中比較の先行研究はいくつかあるものの親子関係との関連を見たものはない。また、学生生活 (学年) が自我同一性の形成に及ぼす影響についても検討する。先行研究では 1～3 年生の影響についてみているが、本研究では 4 年次 (単独) も対象とした。

方法

調査対象者

日本人大学生 111 名、中国人大学生 136 名のデータが得られた。日本の大学は関西圏にある私立 A 大学、O 大学である。中国は上海にある S 理工大学である。その内、留学生、データに不備のあるものを除いて日本人大学生 89 名、中国人大学生 128 名を分析対象とした。平均年齢は日本人大学生 19.5 歳 (SD=1.42)、中国人大学生 19.5 歳 (SD=1.24) であった。

調査時期

調査は日中両国とも 2025 年 9 月～10 月に実施した。

調査手続き

回答に入る前に倫理的配慮事項を説明し、同意を得た者に対し web 形式でアンケートを行った (自由意思による参加)。

使用尺度

自我同一性の尺度として、谷 (2001) による尺度 (7 件法) を用いた。この尺度はつぎの 4 つの下位尺度からなる。

- ・「自己斉一性・連続性」 自己の不変性および時間的連続性についての感覚（以下、連続性と略）
- ・「対自的同一性」 自己意識の明確さについての感覚（以下、対自的と略）
- ・「対他的同一性」 他者から見られている自分が本来の自分と一致しているという感覚（以下、対他的と略）
- ・「心理社会的同一性」 自分と社会との適応的な結びつきの感覚（以下、心理社会と略）

親子関係の質問紙として親子コミュニケーション測定尺度（姜民護 2019）¹⁵⁾ を用いた（5 件法）。この尺度は「気楽なコミュニケーション」「不愉快なコミュニケーション」「気が重いコミュニケーション」を第一因子とし、「統合型親子コミュニケーション」を第二因子とする 13 項目 3 因子二次因子構造からなるが、このうち「気楽なコミュニケーション」から 5 項目を選び用いた。なお本研究では母親と父親を区別せず「親」とのコミュニケーションについて尋ねた。「親」としたのは、先行研究から母親と父親の協働的な養育が自我形成に肯定的影響を与えることが示されており、本研究が（母親と父親を区別しない統合的）親子コミュニケーションの良好性を検討することを目的としていること、および家族状況に対する倫理的配慮のためである。（注 3）

4. 調査研究 結果

1. 自我同一性尺度得点の結果

自我同一性得点に対して、国（参加者間要因：中国、日本）×下位尺度（参加者内要因：連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性）×学年（参加者間要因：1 年、2 年、3 年、4 年）の混合計画による 3 要因分散分析を行った。反復測定分析では、Mauchly の球面性検定を行い、球面性の仮定が成り立たなかった場合には Greenhouse-Geisser の自由度の修正を行った。多重比較は Bonferroni 法により、有意水準は 5%とした。分散分析における効果量は偏イータ 2 乗（ η_p^2 ）を記載した（Cohen は η^2 に対して 0.01：小さい効果、0.06：中くらいの効果、0.14：大きい効果という目安を示している）。その結果、国の主効果が見られ、日本（平均 21.5, SD 4.37。以下、平均（SD）のように記載）の方が、中国 19.5（3.86）より得点が高かった（ $F(1,209)=13.15, p<.01, \eta_p^2=.059$ ）。下位尺度の主効果も見られた（ $F(3,627)=12.83, p<.01, \eta_p^2=.058$ ）。下位検定の結果、自己連続性 21.5(8.43)の得点が高かった（対自的同一性 20.3（4.74）、対他的同一性 18.6(5.78)、社会的同一性 19.7(4.72)）より有意に高かった。学年の主効果も見られ（ $F(3,209)=4.65, p<.01, \eta_p^2=.063$ ）、4 年生 22.4(3.83)が他の学年より得点が高かった（1 年 19.9(3.76)、2 年 19.5(3.83)、3 年 20.2(4.61)、4 年 22.4(3.83)）。交互作用では国と下位尺度の交互作用に有意差が見られた（ $F(3,627)=19.75, p<.01, \eta_p^2=.086$ ）。下位検定の結果、下位尺度の連続性と対他的同一性において日本の方が中国より得点が高かった（表 1）。

表 1 国別の自己同一性下位尺度得点

	連続性	対自的	対他的	心理社会
中国	19.02	20.55	17.75	20.26
日本	25.25	19.90	19.80	18.90
差	**		**	

（中国と日本の得点差 ** $p<.01$ ）

交互作用では国と学年の交互作用も有意となり ($F(3,209)=2.89, p<.05, \eta_p^2=.040$)、中国では学年による有意差はなかったが、日本では4年が他の学年より得点が高かった (図1)。なお学年に関する結果については各学年のサンプル数に偏り (各学年の人数はp6、表3参照) があるため結果の解釈には注意を要する。

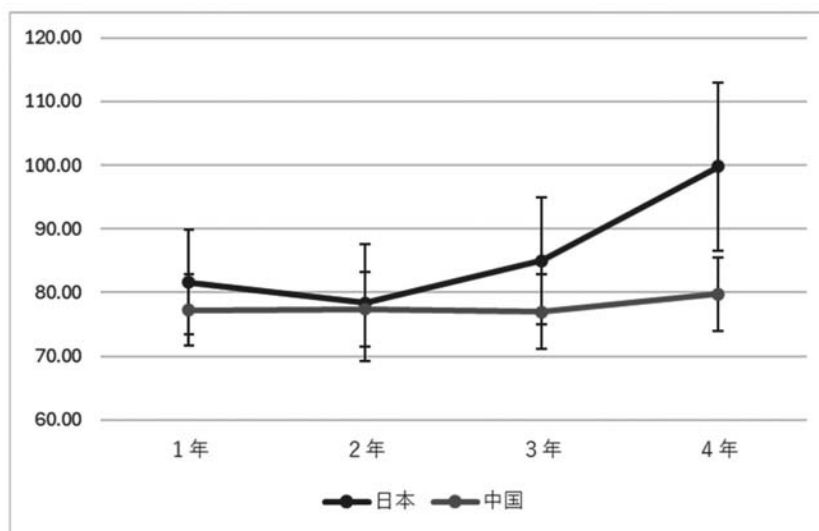


図1 日本・中国の学年ごとの自我同一性得点

2. 親子コミュニケーション尺度得点の結果

親子コミュニケーション尺度の信頼性係数 (クロンバックの α) は.900 であった。親子コミュニケーション尺度得点に対して、国 (参加者間要因: 中国、日本) $\times$ 学年 (参加者間要因: 1年、2年、3年、4年) の2要因分散分析を実施した。その結果、国の主効果が有意 ($F(1,209)=5.52, p<.05, \eta_p^2=0.026$) で、日本 (16.8 (5.13)) の方が、中国 (15.4 (5.85)) より得点が高かった。その他の主効果、交互作用に有意差は見られなかった。

3. 自我同一性尺度得点と親子コミュニケーション尺度得点の相関

日本と中国別に、自我同一性尺度得点 (下位尺度及び合計得点) と親子コミュニケーション尺度得点の相関を求めたところ、両国でいずれの尺度とも有意な相関がみられた。また、日本と中国で相関係数の差を Fisher の z 変換により検定すると、自我同一性総得点では中国の方が相関係数の値が大きかった。日本では中程度の相関係数であるが、中国では非常に強い相関がみられた。下位尺度ごとに相関値をみると日本ではすべての下位尺度で正の相関を示しているが、中国では対自的同一性と心理社会的同一性で負の相関となっている (表2)。また、学年ごとの相関係数を表3に示した。なお、人数が30人未満の学年はノンパラメトリック検定の値である。自我同一性の総得点との相関についてみると、日本では1年と4年で有意な相関が示されているが、中国では全学年で相関が有意である。

表2 国別の相関係数

	連続性	対自的	対他的	心理社会	合計
日本	.326**	.362**	.287**	.376**	.453**
中国	.897**	-.362**	.877**	-.383**	.877**
差	**	**	**	**	**
z	8.00	5.41	7.62	5.70	6.24

(** p < .01 差は日本と中国の相関係数の差 z は Fisher の z 値)

表3 学年ごとの相関係数

	学年	人数	連続性	対自的	対他的	心理社会	合計
日本	1年	44	0.204	0.278	0.103	0.253	.308*
	2年	22	0.118	0.164	0.161	0.219	0.267
	3年	10	0.341	0.214	0.048	0.167	0.193
	4年	13	.643**	0.351	0.313	.467*	.517*
	学年	人数	連続性	対自的	対他的	心理社会	合計
中国	1年	37	.932**	-.601**	.902**	-.347*	.884**
	2年	33	.891**	-0.225	.917**	-.426*	.895**
	3年	38	.911**	-0.207	.837**	-.369*	.884**
	4年	20	.552**	-.519**	.571**	-.418*	.528**

(* p < .05 ** p < .01)

5. 調査研究 考察

1. 自我同一性尺度得点について

自我同一性の総得点についてみると、国の主効果が有意であり日本人大学生(83.72)の方が中国人大学生(77.58)より高かった。下位尺度の主効果も有意であるが、国と下位尺度の交互作用も有意であるため、国ごとに下位尺度を比較すると、連続性と対他的同一性で日本の方が中国より高い結果となっている。この点に関し、谷(2008)¹⁶⁾は4つの下位尺度の概念構造を探索するため、自身のデータ(谷(2001))を用い共分散構造分析を行っている。その結果、下位尺度の背景に「中核的同一性」と「心理社会的自我同一性」の2つの構成概念を仮定した方がよいとした。「中核的同一性」は、「自己斉一性・連続性」と「対他的同一性」から構成される概念で、「心理社会的自我同一性」とは、「対自的同一性」と「心理社会的同一性」から構成される概念である。したがって日本が中国より自我同一性得点が高いという結果は主に、中核的同一性が高いことによるものといえる。谷によれば、中核的同一性は、精神的に中核をなすアイデンティティで主観的なもの、心理社会的自我同一性はより現実的・社会的なアイデンティティの感覚であるとしている。日本

では近年個性化教育が求められているが、中国では画一的な詰め込み教育が残っている部分がある。その意味で「自分が自分らしくある」という感覚に近い中核的同一性は日本の方で育ちやすいのかもしれない。一方、現実の社会に直面することによって形成される心理社会的自我同一性の側面は大学生の段階では日本と中国で差がないのかもしれない。なお下位尺度の中で連続性が高いのは先行研究でも同様であり、下位尺度間での得点の高低に大きな意味はないと思われる。

自我同一性得点には学年の主効果も認められ、4年生で得点が一番高かった。国との交互作用も有意であるため、国ごとに見ると日本でのみ4年生の得点が高く、中国では学年による差はなかった。日本では文献研究で見たように、松島・尾崎（2013）⁸⁾ が自我同一性得点の学年比較を行っており、得点は学年により微増するが有意差はないとしている。しかし彼女らの研究は1年から3年生を対象とした研究であり、4年生は含まれていない。本研究では4年生で同一性得点が高まることが示されたが、これは就活を通じての進路探索の中で、就職センターや友人、親と話し合い、真剣な議論を重ねながら自己を見つめなおす過程で自己同一性が確立していくためと思われる。なお、本研究でも得点が高まるのは4年生の時であり、それ以前の学年では有意な変化はないという点は先行研究の結果と一致する。1年次から3年時の間はクラブ活動、バイト、留学などの経験を通じ自己を見つめる機会があるが、それらは学年別というより個別のものであろう。したがってその間の自我同一性の変化を見るには個別の体験を聞くなど質的研究方法で調べる必要があろう。

中国では学年による自我同一性得点の違いは見られなかった。中国での学生生活サイクルで日本と比べ特徴的なのは、1年では、軍事訓練、寮生活（一般的に4～6人部屋が多い）、2年では専攻分野での学業プレッシャー、3年ではインターンシップ、4年では厳しい就職率下での就職活動である。中国ではほとんどの学生が寮生活を送るが、そこでは人間関係への適応が求められる。インターンシップでも仕事上の人間関係を経験しそれまでの自分とは違う自己の側面を見ることになる。したがって中国では1、2年生での寮生活や学業への馴化の過程、3年生から始まる就活準備などの過程など、どの学年でも一定の自己成長の機会がある。そのため学年による違いが見られなかったのではないかと思われる。

なお、学年差についてはサンプル数の偏りがあるため結果の解釈には慎重さが求められる。

2. 親子コミュニケーション尺度得点について

親子コミュニケーション尺度の得点に関する分析では国による差がみられただけで、学年による差や交互作用に有意差はみられなかった。国の差としては日本が中国より得点が高い結果となっている。中国では「一人っ子政策」の影響でほとんどが一人っ子家族であり、親子間のコミュニケーションは多いと思われるが、そうではなかった。尾島・王（2007）¹⁰⁾ は日中の大学生を対象として親子コミュニケーションについて質問調査を行っている。それによれば、「親と話すことは好きか」という質問に対して、日本では「大変好きである」（25.3%）と「まあ好きである」（63.3）と答えた学生を合わせると88.6%となった。中国では、それぞれ14.0%、62.9%であり、合計76.9%となって日本よりやや少ない。逆に日本と中国とを比較すると、親と話すことが好きではない（あまり好きではない、全く好きではない）、とする中国の学生は、23.1%になり、日本より多い割合となっている。中国では一人っ子のため、親の期待がかえって重荷になっている場合もある。一人っ子だからと言って必ずしもコミュニケーション頻度が多いとは限らないのかもしれない。

3. 親子コミュニケーションと自我同一性の関係

本研究の主目的である親子関係と自我同一性の関係については、日本でも中国でも両者の間に有意な正の相関がみられた。すなわち、親子関係が良好であるとする大学生の方が自我同一性の確立度が高いことが示された。これは親子関係が自我同一性の形成に対して与える影響についてみた先行研究と同じ結果である。親子間での活発なコミュニケーションが大学生の自我同一性形成にプラスの影響を及ぼしているといえる。

この相関係数は中国で.877と非常に大きな値となり、日本の相関係数値(.453)より有意に高かった。中国では親子関係が自我同一性の形成に非常に大きな影響を及ぼしているといえる。ここで家族形態についてみると中国では一人っ子の割合が非常に高い。本研究では兄弟の有無も尋ねているが、中国では128名中114名が一人っ子で、その割合は89%にのぼる。日本では逆に兄弟のいる学生の方が多く(89名中77人)その割合は87%にのぼる。自我同一性に与える要因として家族に絞ってみると、親子関係も重要であるが、兄弟からの影響もあるのではないか。例えば兄の生き方をモデルに自己の将来について考えたり、兄弟間の比較を通して自分の特徴や性格について考えるなど、兄弟がいることで自分について考え、それが自我同一性に少なからず影響を及ぼしていると推測される。それに対し中国では日本に比べると一人っ子がほとんどでそのような家庭では兄弟からの影響はないと考えられる。したがって中国で大きな相関係数値になったのではないかと考える。これを模式図的に示したのが図2である。なお図中の数値で両親からの影響は本研究で得られた相関係数の値であるが、兄弟からの影響は1からその値を引いた値であり、実際に兄弟間の影響について調べたものではない。影響の違いについてあくまでも模式図的に示したものである。

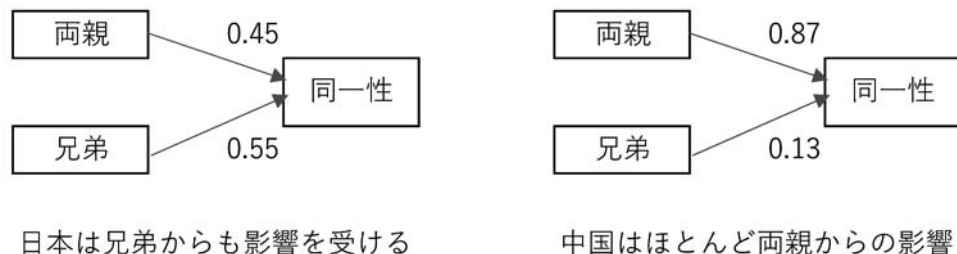


図2 両親・兄弟からの影響比率の模式図

次に、下位尺度ごとに相関を見ると日本では下位尺度による大きな違いはなくいずれの下位尺度でも中程度の相関となっている。それに対し中国では連続性と対他格的同一性は正の相関であるものの、対自格的同一性と心理社会的同一性では負の相関となっている。つまり連続性と対他格的同一性では親子関係が自我形成にプラスの影響を与えるが、対自格的同一性と心理社会的同一性では親子関係の良好さがかえって自我形成を阻害していることを示している。この点について考察を試みる。まず下位尺度の連続性と対他格的同一性は中核的同一性、対自格的同一性と心理社会的同一性は心理社会的自我同一性としてまとめられる(谷, 2008)¹⁶⁾が、負の相関となっている下位尺度の対自格的同一性と心理社会的同一性は心理社会的自我同一性としてまとめられる。心理社会的自我同一性は社会に直面することで形成される、より現実的・社会的同一性である。すなわち、親子関係が良好であるだけでは自己の社会的側面が育たないことを示唆している。ここで親子関係について詳しくみてみると、平田(2018)⁵⁾は、青年期のアイデンティティの形成には応答性だけでなく、応答性とのバランスが取れた要求性、すなわち明確な基準のもとに適切に子どもをしつける養育行動が必要

であると述べている。また高橋（2008）⁴⁾も議論の回避を示す青年は自我同一性達成得点が低く、職業決定におけるモラトリウム得点が高いことを示し、親子間で議論を避けないことが自我形成に重要であると述べている。本研究では親子コミュニケーション尺度を用いたが、質問項目は「気楽な」コミュニケーションについて尋ね「気の重い」コミュニケーションについては尋ねなかった。先行研究は親子関係において、とくに職業決定など現実的社会的場面では、気軽な関係だけでなく親と子が主張しあうコミュニケーションも必要なことを示している。したがって中国において親子関係が心理社会的自我同一性に負の影響を及ぼしたのは気楽なコミュニケーション（応答性）だけでは同一性の形成を促進しないためと思われる。本研究では尋ねていないが、進路決定時における主張的コミュニケーションもできる親子であるかどうか調べ、それができる親子であれば心理社会的自我同一性へもプラスの影響を及ぼす結果を示せていたのではないかと推測される。中国では一人っ子は小皇帝と呼ばれることがある。一人っ子であるため甘やかされて育ち、未熟なまま大きくなった子どものことをさす言葉である。中国でのそのような親子においては、表面的には親子関係は良好そうに見えるが、進路決定の際など現実の社会的選択場面に遭遇した時に、お互いの意見を主張するコミュニケーション（要求性）を回避してしまう傾向にあるのではないかと。本来であれば応答性と要求性のバランスの取れたコミュニケーションが最も自我同一性を促進するが、応答性だけのコミュニケーションは現実には直面した時かえって子どもの自立を阻害し、結果自我同一性の形成を阻害するためこのような結果になったのではないかと推測する。

このような結果に関連して姜・岡田（2023）¹⁸⁾は自我同一性ではないが、同じく自己に関する概念である自立について日本と中国の大学生を比較した調査研究を行っている。その中で彼らは親子関係（親との交渉能力と親への信頼からなる）が自立（人間関係、生活管理能力、自己認知と自己表現、物事への対応能力、政治や社会への関心）に及ぼす影響について調べているが、日本の大学生では親子関係は自立に有意な影響を与えていなかった。中国の大学生では親子関係の「親への信頼」が「自己認知と自己表現」や「物事への対応能力」に正の影響を与えていたが、「人間関係」に対しては負の影響を与えていた。親への信頼が自己や対応能力に良い影響を及ぼす一方、人間関係の形成にはマイナスの影響を与えるというという結果であるが、この結果は良好すぎる親子関係が自我同一性形成の阻害要因になりうるという本研究の結果と通じるものがあり、非常に興味深い。姜・岡田（2023）¹⁸⁾も中国においては親子関係が自己意識を高め自立に良い影響を与える一方、親に頼りすぎて依存してしまう場合には自立に悪い影響を及ぼす可能性があるとしているが、これは自我同一性形成においても当てはまるだろう。

以上をまとめると、①中国では一人っ子が多く親子関係が密接になりすぎるため依存的関係になりやすく、②要求性の不足した応答性のみの親子コミュニケーションになりやすいため自立が遅れ、心理社会的同一性形成に負の影響を及ぼしたと考えられる。

学年による親子関係の影響についてみると日本では1年次と4年次で相関係数が有意であった。親子関係コミュニケーションの得点自体は学年による変化がないため、この結果には会話の質・内容が関係していると考えるのが自然である。1年生の時は大学生活に慣れていく過程で親に相談などをする機会が増えるためその過程でより内面的な会話が増え、4年生の時は就職先を決める過程で将来の進路・見通し等を語り合う中でより現実的社会的会話が増加する時期である。そのような親子のやり取りが他の学年に比べより多く自我同一性形成に正の影響を及ぼしたと考えられる。一方、中国では学年によらずどの学年でも相関係数は高く、親子関係の影響に学年差はない。先述したように中国では1、2年次では寮生活や学業に慣れていく過程で、3、4年次ではインターンシップや就活の過程で常に親とのコミュニケーションがとられているのだろう。したがって学年による親の影響の違いが見られなかったのではないかと推測する。

6. 総合考察とまとめ

本研究は親子関係が大学生の自我同一性に与える影響について実証的に調べるのが第1の目的であった。日本と中国の大学生にアンケート調査を行ったところ、どちらの国でも親子コミュニケーション尺度と自我同一性尺度に有意な相関がみられ、親子関係が自我同一性の形成に重要な役割を果たしていることがわかった。相関係数値は中国の方が日本より有意に大きく、中国の方が親子関係の影響力が大きいことも示された。これは中国において一人っ子の割合が多く、親子関係がより密であるためであると思われる。本研究では多次元自我同一性尺度を用いているが、下位尺度間での違いも示された。尺度間の違いから心理社会的自我同一性の形成には、親子のコミュニケーションにおいて応答的なコミュニケーションだけでなく要求的なコミュニケーションも必要であることが示唆された。また、日本においては大学生活（学年）の影響もみられ、大学1年次と4年次で親子関係の影響が大きいことも示された。

本研究の限界は調査対象者が各国100名前後と物足りないことである。また対象の大学の数も少ない。100名というのは国の比較としては十分だが、兄弟の有無による違いや男女による違いをより細かく見るには不十分である。学年による比較検討もしたが、サンプル数が偏っているため結果の解釈も慎重にならざるを得ない。したがって今後調査対象者や対象大学を増やし、今回推測段階であった点を確認する必要がある。また親子関係として母親・父親を分けていない点も問題である。昨今の家族状況から倫理的配慮として対象者の家族について立ち入った質問をすることは難しくなっているが、先行研究からは親子関係における母親・父親の違いは明らかである。今後倫理的側面に十分配慮しつつ、これらの点について明らかにする必要がある。

自我同一性の確立は青年期における最重要課題であり、その確立は精神的健康、心理的安定感、進路選択、充実感、動機づけ、学業達成などに関係する。本研究はその自我同一性の形成要因としての親子関係の重要性を示すことができた。またその影響の仕方は日本と中国では若干異なることも示すことができた。これが本研究の意義であり独自性である。

注

注1) 本研究は令和7年度芦屋大学大学院教育学研究科に提出された修士論文『中日大学生における自我同一性と親子関係の関連性』（楊沢升）のデータを再分析し、大幅に加筆・修正したものである。

注2) 近年、自我同一性の概念について見直しがなされている。臨床心理学の分野では林（2026）¹⁹⁾ による論考がある。林は、エリクソンの時代は家族、地域、職業、国家などの枠組みが明確で安定したものであるといった前提に立っているが、近年、グローバル化、情報化、個人主義の進展により、これらの枠組みが相対化し、自己を定義する基盤は多様性の中で揺らぎを見せていると指摘している。そのため現代においては自我同一性の基準はより曖昧で脆弱なものとなっていて心理社会的発達理論の視点からでは自己をとらえきれないとして、臨床心理学の立場から自我（自己）同一性の再定義を試みている。

心理学の分野では、木谷・岡本（2018）²⁰⁾ が大学生を対象として、現代青年のアイデンティティに関する実証的な検討を行っている。その結果、現代青年のアイデンティティの在り方には、エリクソンが述べたような、「適所を選択し、重要な他者からの承認によって内的同一性と社会的同一性を獲得する在り方」と、「多元的アイデンティティを形成する青年」の2つのタイプがあることを示唆している。

しかしながら村井・加藤 (2020)²¹⁾ は社会学領域で作成された多元的アイデンティティ尺度を使用し、尺度の構造および信頼性を確認することを目的として調査を行ったが、想定された3因子構造とは異なる2因子構造となり、また尺度の信頼性も不十分であることが明らかとなったと報告している。

本研究では日中比較が主な目的であり、信頼性・妥当性が確保されている尺度の方が両国を比較する際には望ましいと考え、従来の概念や尺度に基づいた研究を行っている。多元的アイデンティティの観点からの日中比較研究は今後の課題といえよう。

注3) 倫理的配慮について姜 (2019)¹⁵⁾ は次のように述べている。

『離婚や未婚、死別、事故など多様な理由で「世帯の構造」が変わりつつあるなか、子どもによっては「親（養育者）の性別」を聞かれるだけで心を痛めるかもしれない。このような状況のなかで本研究の統合型親子コミュニケーション測定尺度は、父親と母親両方の全ての質問項目に欠損値を有さない大量のデータを用いて成り立っていることから、子どもに「親（養育者）の性別」を聞かなくても精度の高い結果を見出すことができる点で「倫理的配慮」という側面からも評価できよう。』姜民護 (2019)¹⁵⁾ p60 より引用。

参考文献

- 1) Erikson, E.H. 1963 *Childhood and society*. 仁科弥生 (訳) (1977) 幼児期と社会 I・II, みすず書房.
- 2) 谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造 —多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—, 教育心理学研究49, p 265-273.
- 3) 金美伶 2006, 青年期の同一性形成に影響を及ぼす重要な他者との関係, 人間文化論叢第9巻, p325-333.
- 4) 高橋彩 2008, 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連, パーソナリティ研究 第16巻 第2号, p159-170.
- 5) 平田裕美 2018, 父親・母親の養育スタイルに関する大学生の回想とアイデンティティ形成, 心理学研究 89, p221-228.
- 6) 鶴田和美 2001, 学生のための心理相談, 培風館.
- 7) 徳田完二 2008, 学生期ライフサイクルから見た職業決定プロセスの諸側面, 立命館人間科学研究17, p 1-14.
- 8) 松島るみ・尾崎仁美 2013, 大学生のアイデンティティとその関連要因, 京都ノートルダム女子大学研究紀要 (43), p 1-13.
- 9) 宇都宮真輝 2018, 大学生におけるアイデンティティ発達と学業・友人・家族機能との関連 —学生生活サイクルの視点から—, 吉備国際大学研究紀要 (人文・社会科学系) 第28号, p 27-43.
- 10) 許英美・田中雄三 2004, 日中大学生の自我同一性地位に関する比較研究—文化的自己観からのアプローチ— 鳴門生徒指導研究 第14号, p.17-31.
- 11) 加藤厚 1983, 大学生における同一性の諸相とその構造, 教育心理学研究 第31巻, p.292-302.
- 12) 張愛子・宮下一博 2013, 日中青年における自己愛傾向とアイデンティティとの関連, 千葉大学教育学部研究紀要 61巻, p103-110.
- 13) 董万娜・菅千索 2014, 職業決定と自己意識との関係について —日中大学生の比較に注目して—, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 No.24, p.31-41
- 14) 水野 正憲 2006, 自我同一性に関する日中大学生の比較, 岡山大学教育学部研究集録 第133号, p 47-55.
- 15) 姜民護 2019, 親子コミュニケーション測定尺度の因子構造と項目構成に対する再検討評論・社会科学 130, p 45-63.
- 16) 谷冬彦 2008, アイデンティティのとらえ方 岡田努・榎本博明 (編) 自己心理学5, パーソナリティ心理学へのアプローチ, 金子書房, p.6-21.

- 17) 尾島恭子・王彩霞 2007, 大学生の親子関係と経済意識に関する日中比較, 金沢大学教育学部紀要 (人文科学・社会科学編) 第 56 号, p 67-75.
- 18) 姜妍・岡田みゆき 2023, 日中の大学生の自立に及ぼす関連要因, 北海道教育大学紀要 (基礎研究編), 第 73 巻 第 1・2 号, p109-124.
- 19) 林知代 2026, 現代における自己同一性形成の再定義に関する一考察 ―Erikson の心理社会的発達モデルをこえて―, 芦屋大学論叢第 85 号, p 99-107
- 20) 木谷智子・岡本祐子 2018, 「自己の多面性とアイデンティティの関連 ―多元的アイデンティティに注目して」, 『青年心理学研究』 29, p 91-105.
- 21) 村井史香・加藤弘通 2020, 高校生を対象とした多元的アイデンティティ尺度の検討, 子ども発達臨床研究14, p17-21.